蘇芳集

改元

髙橋　さえ子

ＮＨＫホールへつづく恵方道

改元の年か蜜柑を剝きにけり

毛糸帽真白朝日をつつみこみ

水鳥の二羽はつがひか寄りにけり

凍つる夜の光を放つ管楽器

湯気立ててラヂオの深夜放送よ

服薬の水滴あをし夜半の冬

白い遅日

青山　丈

春はあけぼの病院に寝てをりぬ

対岸は金町けふは彼岸入

春の空ねむれるところまで眠る

青空の青の足りない彼岸入

中日や病衣の袖の短くて

ベッドより遅日の腕を垂らしけり

ただ白い遅日の枕ぽんと置く

読みぞめ

小川　美知子

蓮掘りの昼餉に帰る蓮田道
道祖神の先より坂のしぐれけり
貼紙あり「落葉掃かないでおきます」
元朝の茶碗と箸を洗ひけり
手に重き五年日記を初日記
読みぞめのきれいな栞選びけり
アネモネやレジ打つ人の入れ替はる

恋雀

金田　きみ子

雨あとの日の散らばつて椿山
満身の日差しに溺れ恋雀
何か翔ちしあと雀来て春の芝
たはやすく春草抜けば根の赤く
考ふる眼裏熱し紅つばき
芽吹く木に話かけみる幹叩き
よく笑ふこの家の媼春灯

小六月

上林　孝子

枯るるもの枯れ一月の海匂ふ
はろばろと元朝の海おだやかや
子供らの路に絵を書く小春かな
履きなれし靴の片べり小六月
声かけてあがる子の家石蕗の花
行間に降る雪見ゆる故郷（くに）便り
かいつぶり潜れば昼の空明し

日の微塵

木内　憲子

切手貼り足していよいよ十二月
一陽来復鳥翔てば日の微塵
立つものは構へて寒波海より来
冬芽たつ命軽きと思ふ日の
枯るる身と思ふ数歩を日向かな
日当れば鉄路あかあか寒土用
沢山のことして年を送りけり

寝釈迦さま

小島　みつ如

白雲の寝釈迦さまめく初雀
初富士へ南無阿弥陀仏師の声も
冬草のいのちの群るる崖の隅
あらたまの孫より受くる名刺なる
やはらかき日をはじきをり冬木の芽
大寒や物見ればもの見返りぬ
花八ッ手人の手かりて湯浴みかな

霜の朝

清水　裕子

仏飯の湯気に明けゆく霜の朝
橋渡るなり一月の川見つつ
手荷物の無きも淋しや冬薔薇
喉病む水仙の向き定まらず
マスクして人の言葉を聞き洩らす
落椿みてゐて心空ろなる
夕方の空を染め上げ焚火かな

寒日和

真保　喜代子

丘の上の家を眩しむ寒日和
節分や昔話になる昭和
ひとり撒き一人拾ひて追儺豆
水鳥の寡黙の群として進む
枯木影枯木の方へ伸びゆけり
この先に古墳も眠るあたたかし
歌ふごと囁きのごと春の波

龍の玉

冨田　正吉

綿虫飛ぶ師を恋ふやうに追ふやうに
先生の聲が聴きたし龍の玉
十二月八日の顔を剃りにけり
先生のいつも弟子です龍の玉
師の言葉どれも大事や鳥総松
地下鉄に花のにほひや成人日
流れ藻のやうな久女の忌なりけり